絵巻を愉(たの)しむ

―《をくり》絵巻を中心に

絵巻を愉しむ

―《をくり》絵巻を中心に

平成二十七年七月四日(土)～八月三十日(日)

宮内庁三の丸尚蔵館

目次

3 ―― ごあいさつ
4 ―― 絵巻――豊かな創造性と表現技巧
7 ―― 図版・解説
8 ―― 絵師草紙
10 ―― 住吉物語絵巻
12 ―― をくり（小栗判官絵巻）
34 ―― 酒伝童子絵巻
40 ―― 彦火々出見尊絵巻
52 ―― 若蘭絵巻
ii ―― 出品目録　List of Exhibits
i ―― Foreword

凡例

一、本図録は、平成二十七年七月四日（土）～八月三十日（日）までを会期とする展覧会「絵巻を愉しむ―《をくり》絵巻を中心に」の解説図録である。

一、展覧会の出品作品は、作品保護のため、会期中に展示替えを行う。

一、展覧会出品作品のうち、複数巻による作品は、そのうちの数巻から選んで展示を行う。但し、本図録には、物語の展開が判るように、展示以外の場面も掲載している。

一、出品作品の法量は、巻末ii～iv頁の「出品目録　List of Exhibits」にまとめて掲載した。なお、法量は縦×横（長）の順で表示した。

一、本展覧会の企画は、三の丸尚蔵館学芸室主任研究官・太田彩が担当し、同研究員・斉藤全人が協力した。

一、本図録の作品解説は、《絵師草紙》《彦火々出見尊絵巻》を斉藤が、《住吉物語絵巻》《をくり（小栗判官絵巻）》《酒伝童子絵巻》《若蘭絵巻》を太田が分担執筆した。

一、本図録掲載の写真は、当館が保管するフィルムおよびデジタル画像による。このうち、デジタル画像については、渡辺正明、堀吉彦（以上、株式会社堀内カラー）、福島省、佐野順一（以上、株式会社インフォマージュ）による。

ごあいさつ

物語を絵画化し、巻物の形態に仕立て、愉しむ――わが国では、平安時代半ば頃、十世紀後半頃から美術作品として絵巻が制作され、享受されてきました。当初は、王朝文学の成立、発展とともに貴族的な題材のものが制作されましたが、次第に武士の社会を反映した戦記絵巻や、仏教布教のためのもの等が制作され、幅広い層の人々を愉しませるものとなりました。物語の内容をどのように絵画化して展開するのか、それは絵師のイメージの表現です。鑑賞者はそのイメージ化された画面を見ながら、さらにイメージを膨らませて絵巻を愉しむ。絵巻が長く、多くの人々に親しまれたのは、そうした豊かなイメージを愉しむことができるものであったからでしょう。

今回の展覧会では、ある絵師の実生活を描く《絵師草紙》(鎌倉時代)、継母にいじめられながらも幸福をつかむという日本版シンデレラ物語ともいえる《住吉物語絵巻》(室町時代)、数奇な運命の男女が苦難を乗り越えるという人気の説教節を絵画化した《をくり(小栗判官絵巻)》(江戸時代)、大江山の鬼退治の話で知られる《酒伝童子絵巻》(江戸時代)、そして海幸彦と山幸彦の記紀神話を描く《彦火々出見尊絵巻》(江戸時代)、さらに中国四世紀中頃の蘇蕙(若蘭)が夫に贈った八百四十字からなる回文詩の故事を絵巻化した《若蘭絵巻》(明時代)を紹介します。

それぞれの絵巻がもたらす豊かなイメージの世界を愉しんでいただければ幸いです。

平成二十七年七月

宮内庁三の丸尚蔵館

宮内庁三の丸尚蔵館所蔵　出品作品一覧　（第69回　絵巻を愉しむ―《をくり》絵巻を中心に）

作品番号	作品名	作者名	員数	時代	ページ
	絵師草紙		一巻	鎌倉時代（14世紀）	p. 8-9
	住吉物語絵巻　巻上		一巻（二巻のうち）	室町時代（16世紀）	p. 10-11
	をくり（小栗判官絵巻） 巻一・二・四・五・七～十五	伝岩佐又兵衛	十三巻 （十五巻のうち）	江戸時代（17世紀）	p. 12-33
	酒伝童子絵巻　巻一・二・四・五		四巻（五巻のうち）	江戸時代（17世紀）	p. 34-39
	彦火々出見尊絵巻　巻一・三・四・六		四巻（六巻のうち）	江戸時代（17世紀）	p. 40-51
	若蘭絵巻	仇英	一巻	中国・明時代（16世紀）	p. 52-55

絵巻 ——豊かな創造性と表現技巧

絵巻は、物語が右から左へと、詞と絵によって展開しながら語り進める、わが国特有の巻物仕立ての物語絵画である。物語がいくつかの段落に分けられ、その段毎の詞とその内容に対応する絵とが一組となって一段を構成し、それが数段、数十段と集まって一巻、あるいは数巻となる。一段の長さは長短様々で、この変化が物語の展開を面白くして独特の表現を生み出してもいる。

絵巻は、平安時代、十世紀後半頃、中国から伝来した巻物の形態に、わが国で成立した物語や説話を題材として、絵を伴って展開していく形でその制作が始まったと見られる。院政期、十二世紀は絵巻物の黄金期。《源氏物語絵巻》《信貴山縁起絵巻》《伴大納言絵詞》が現存し、また《年中行事絵巻》《彦火々出見尊絵巻》などが制作された。十三世紀には、それまでの王朝的、貴族的な題材に加え、武士の台頭に伴って戦記絵巻の制作が多く行われ、また新旧仏教の布教のための絵巻制作も行われて、その幅が広がった。さらに室町時代に向けて、絵巻の受容層が広がり、同時にその制作が大量生産型へと進んだことで、芸術性に乏しい作品が多くなる。しかし、御伽草子系の物語を題材として、本格的ではないが味わいのある独特な絵画表現で親しまれた作品も多く生み出され、人々の中に浸透していく。そして近世は、大名らの高位の人々が競うように華やかな絵巻制作を進めたことから、それまでにはなかった長大な絵巻、極彩色の豪華な絵巻が誕生する。さらに、町人層らが意欲的に文学や芸能に親しむようになるにつれて絵巻の大量生産が再び進むこととなり、絵巻は広く親しまれる一方、次第に個性を失い類型化していった。絵巻は八百年以上にも及ぶ長い歴史の中でその盛衰を様々に繰り返して連綿と続いたのである。それは、詞と絵の共演によって、人々を物語の世界に引き込み、想像力を駆りたてて、豊かなイメージを愉しませるものであったからに他ならない。

現代の我々は、生活の中で余りにも多くの情報とビジュアルに囲まれ過ぎていて、自身のイメージを膨らませることが実は下手になっているのではないかと思うことがある。そんな現代人が三百年、五百年、七百年も前に描かれた絵巻の描写に感動を覚えることがある。豊かなイメージとその表現力に驚かされるのである。TVの動画映像は鮮やかな色彩と様々な音によって人々を惹きつけようとするが、絵巻に描かれた静止画面は、その演出を豊かな表現力を通して、観る者に自身の中で会話を、音を想像させ、景色を想像させて、実在の場面の様な架空のビジュアルな世界を愉しませてくれるのである。ストーリーの中の出来事が空間描写の景色等と共に描かれて絵場面が創り上げられているが、それは実に創造性豊かなものであり、それをさらに享受した者が想像を広げて自身の情景を描き上げるのである。

絵場面の描写とその展開は、その絵巻を特色づける大きな要因となるが、魅力的な描写は、以後の別の絵巻描写の中にも取り入れられたり、絵巻そのものの模本が作られることにもなった。その代表的な作品の一つが、当館収蔵の中世絵巻の名品《春日権現験記絵》(延慶二年、一三〇九年頃)である。絵巻の内容は、春日社を氏神とする藤原氏の繁栄を祈願して制作された縁起絵巻で、絵所預の高階隆兼が率いた宮廷工房で、隆兼の指導のもと、優美な色調と筆遣いによって描かれた画面は、制作当初間もなくより高い評価を得た作品である。描かれる様々な人物のポーズ、景物、場面構成等がその後の絵巻描写に取り入れられて継承された。優れた絵巻の中の描写を一つの古典的描写として後の絵巻が引き継ぎながら、また新たな発想での描写となって異なる興味深い場面を創り、

絵巻《をくり》 ―小栗と照手の恋文のやりとり（第３巻第８段～第５巻第 10 段、場面は右から左へ、上から下へ展開）

それがまた継承される。イメージからイメージが生み出されていくことで、絵巻の絵画表現はさらに豊かさを増していったのである。

さて、今回の出品作品のなかに、《をくり》という江戸初期の絵巻がある。戦国武将、荒木村重の子として誕生したと伝えられ、十七世紀前半に京、福井、江戸を起点に、大名のもとで制作を行って活躍した岩佐又兵衛が、彼の工房を率いて制作した作品と考えられている長大な絵巻である。絵巻の詳細は12頁からの解説、図版をご覧いただきたいが、色彩の鮮やかさ、描写の精緻さ、人物表現や動勢豊かな場面展開は、絵巻の面白さを存分に発揮した作例でもある。この絵巻の場面構成には、先例となる優れた絵巻の描写を参考にしていることが看取され、又兵衛が古典絵巻を習知した上で新たな絵巻を制作したものと考えられる。先例となる古き絵巻のイメージが、後の時代にまた新たなイメージで描かれ、人々の興味をそそる。文化の伝統の継承の在り方として、一つの好例をここに見出すことが出来よう。

《をくり》は、又兵衛風と呼ばれる特徴的な画風によって、細かな場面展開が説教節の語り口調と共に展開する点に大きな特色がある。まるでアニメーションのコマ送りのような展開は、執拗とも言える一方で、より視覚的な効果を高めて興味をそそる展開を生み出しているとも言えよう。例えば、第三巻第七段、商人の後藤左衛門が小栗の館を訪ねた場面から、小栗が左衛門から照手姫（照手）の話を聞いて恋文を書き、左衛門はそれを照手に届け、照手は初めは恥じらいながらもその恋文に心ときめかせて返事を書き、左衛門はそれを小栗に届け返す第五巻第十段までの二十五段（二十五場面）を、実に約二十九メートルにも及んで場面を展開している（この場面は前頁に紹介。但し、紙面の制約上、第三巻第九段と第四巻第六段を欠く）。特に、照手あての恋文と知って笑う女房たちの様子に気づいて登場する照手が、恋文と知って一度は破り捨て、でもやはり心の中では嬉しくて、恥じらいながらも心ときめかせて返事を書くという場面が、左衛門、女房たち、そして照手の動きと表情を巧みに描いて実写さながらに展開する。この様に、場面の連続性を高めて仔細に場面展開をしていく箇所は、その連続の長短の変化をつけながら絵巻の随所に取り入れられ、結果、絵巻全体が詳細な場面展開をする長大な絵巻となっている。これは、本絵巻が語り調子のリズム感ある詞を用いて、そのリズムに乗せて場面展開が進むことも考慮しているであろう。閻魔王に餓鬼の姿でこの世に戻された小栗が、見知らぬ多くの人々に熊野を目指して「えいさらえい」と引き継がれていく九十段余、六十三メートルにも及ぶ長大な場面は、まさに語り調子の詞のリズムが画面展開を軽快に進めゆく。説教操という芸能と文学、そして絵画制作のコラボレーションが生み出した新たな魅力がこの絵巻にはある。

今回の展覧会で紹介する作品は、それぞれが特色ある魅力を持つ作品であるが、原本は平安時代末頃の制作で、江戸時代の模写による絵巻《彦火々出見尊絵巻》にも注目したい。原本の姿を忠実に伝えるものと考えられていることから、十二世紀末の絵巻の描写の豊かさ、展開の面白さに触れることが出来る。この絵巻では、画面に詞が記されている（画中詞）が、一箇所だけ「龍王のひめきみ」と書かれる以外は、「〇〇するところ」と場面の説明だけを記している。これは、40頁からの図版を見ていただいても判るように、一つの段が長いこと、その中での物語展開が大きいこと、また話の舞台が竜宮と地上を往還しているためにそれぞれの場所を明記する配慮があったことにより、自然とそうした注記的な書き入れが行われたのであろう。異時同図法や場面の長短など、場面構成が考慮されている上に、竜宮の人々の様々な描写の工夫が興味を惹き、神話の世界を新鮮なイメージで愉しむことが出来る。七百年も前の人たちのイメージの豊かさに驚かされる。

絵画作品の一つとしての絵巻であるが、描き表された絵場面は、ストーリーテリングのための様々な工夫―登場人物の形姿、場面設定、構図、描写方法、時間推移の表現、背景描写等々―が凝らされ、その造形表現のための創造性、伝統性の継承、洗練された感覚が相呼応して創り上げられた高度な絵画表現であると言えよう。長い年月、そうした優れた絵画表現に触れてきた日本人の表現や技術に対する感覚が世界的に見ても優れていることは、現代においても、アニメーションが高い評価を得て世界的に多くのファンを育てていることを始め、細やかで優美な意匠による様々な品々が広く好まれている点にも連綿と続いている。小さな島国、わが国日本の文化の伝統は実に深い。その誇るべきものの一つとして、〝絵巻〟に親しみ、愉しんでいただければ幸いである。

（学芸室主任研究官／太田　彩）

図版・解説

絵師草紙

一巻　紙本着色　鎌倉時代（十四世紀）

生活に窮する絵師に領地が与えられる、という降って湧いたような幸運と、結局それがぬか
び に終わるという悲喜劇を描いた絵巻。詞書によると、絵師がその身に起きたエピソード
自らの筆で絵巻に描いた設定となっており、出典となった物語は不明である。詞、絵各三段
構成された本絵巻の概要は次の通りである。

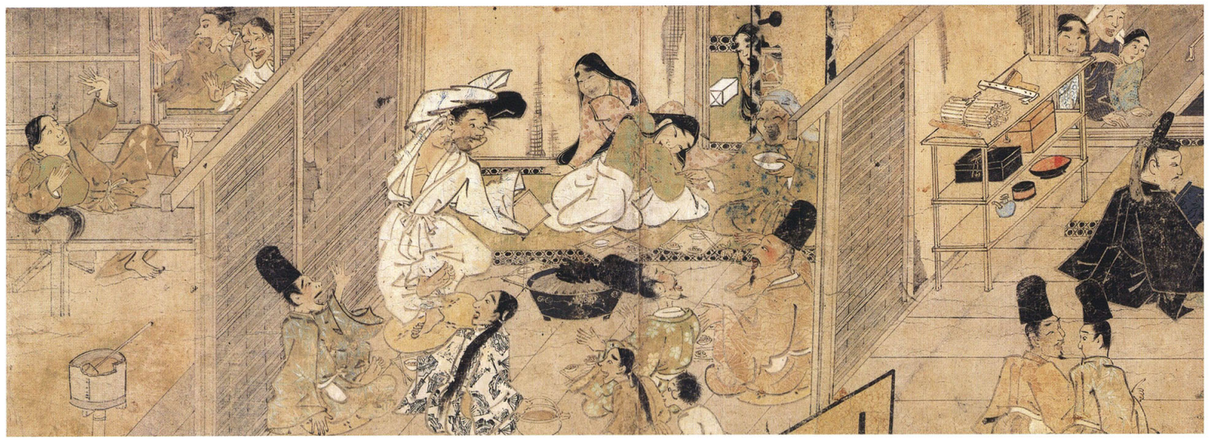
〔第一段〕都に住む貧しい絵師の一家があった。ある日その絵師に対し、伊予国（現在の愛媛
）の所領地を賜るという宣旨が朝廷よりもたらされた。絵師が妻子親族弟子一同を集めてそ
事を告げると皆大喜びし、すぐに盛大な酒宴が催された。

〔第二段〕絵師は領有することとなった土地の検分のために使いを遣った。しばらくして使
から届いた手紙には、その土地は百姓達が武器を手に取る物騒な土地であり、また年貢はす
に他の者に徴収され跡形もないと書かれていた。領地の賜りが期待外れであったことを知
途方にくれる絵師のもとからは、現金な親族縁者が次々と去っていき、年老いた母と妻らが
るのみであった。

〔第三段〕絵師は、法勝寺（平安京の白河に建立された六勝寺の一つ）の行事弁（寺の行事を
り仕切る弁官）のもとに陳情に赴いたが、その土地はすでに寺領であるとして取り合っても
えない。絵師は法勝寺の上卿（重要な寺からの院・天皇への奏請を取り次ぐ公卿）に帝への
上を願い出た。その甲斐あって帝から所領を絵師に返すようにとの勅答があったが、絵師
あつかましくも伊予国は遠いので賜る領地を近い場所に変えてほしいと、希望する候補地
で挙げて再度申し出た。それ以降、待てど暮らせど絵師の訴えに対する音沙汰はなかった。
師は世の無常を悟って仏道に帰依し、我が子を真言宗の寺に入れた。そして事の顛末を己
家業である絵筆に託してこの絵巻を制作したのであった。

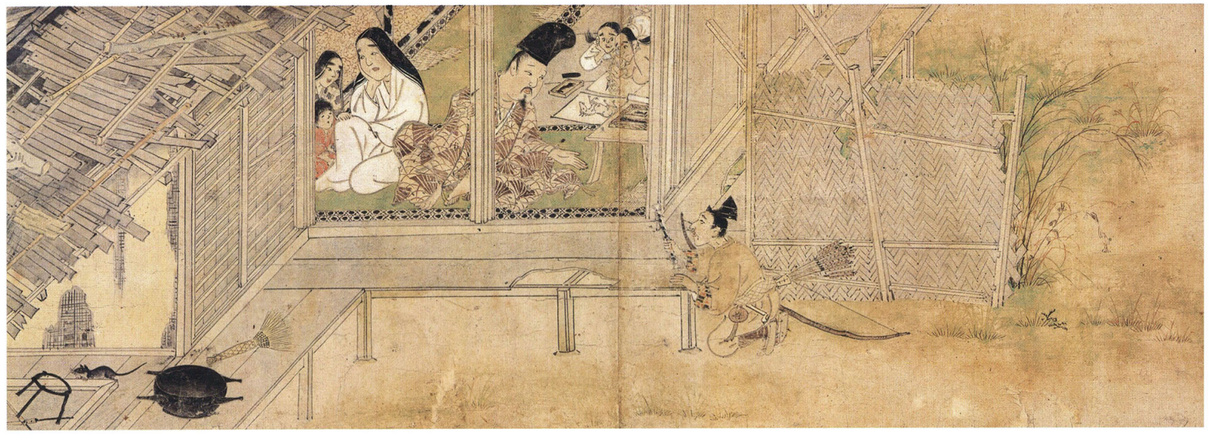
本絵巻の描写表現は、画面に対して大ぶりに描かれた登場人物や、喜怒哀楽をいささか誇張
た表情などに特徴があるが、その一方で、家屋は几帳面に引かれた直線で構成され、また室
の調度や人々の衣服の文様、そして庭の草花などは細部にいたるまで神経の行き届いた描
がなされている。そうした描写からは、領地をめぐって一喜一憂する主人公の絵師に過度
感情移入することなく、抑制された筆致で淡々と描く作者の冷静な視線が感じられ、それは
師の男が物語の終盤に悟る「もののあはれ（無常観）」と見事に共鳴している。絵巻の作者を
絵の名手藤原信実とする伝来を鵜呑みにすることはできないが、それでも鎌倉時代後期ま
に制作されたものと考えて差し支えないだろう。

本絵巻は明治二十年（一八八七）十月、公爵徳川家達邸に明治天皇行幸の折に献上された。
治天皇はお手許に置かれるほどこの絵巻を大変好まれたという。

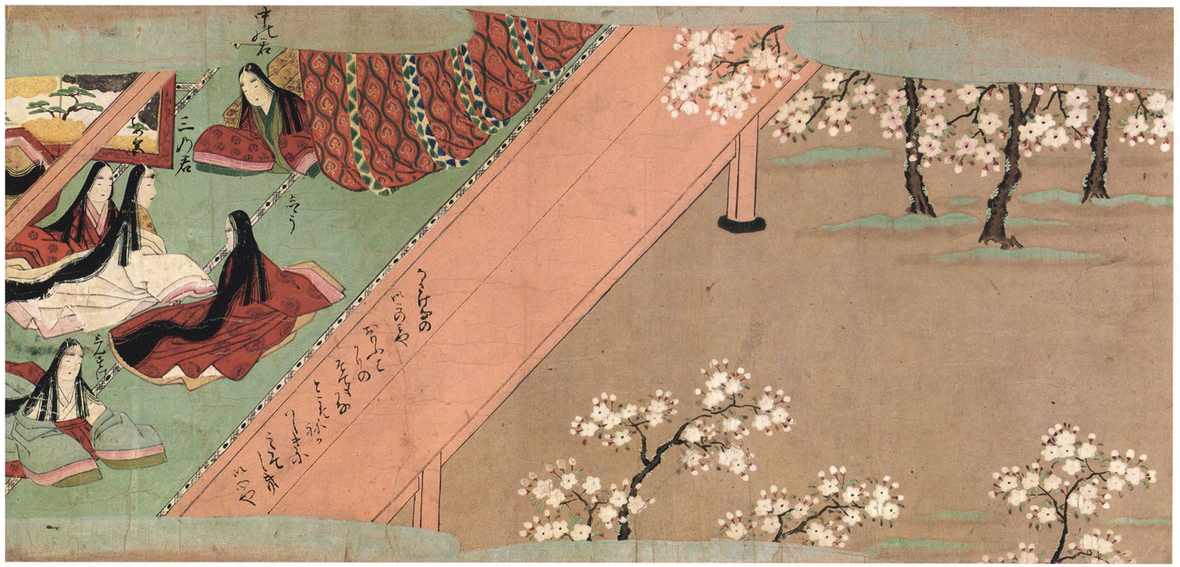


祝宴が始まる

絵師、宣旨を読み聞かせる　第1段



絵師、使者の文に落胆する　第2段



物語の冒頭。中納言には三人の姫がいた　巻上

住吉物語絵巻

二巻のうち　紙本着色　室町時代（十六世紀）

『住吉物語』は、『源氏物語』にその名が見える古い物語。幅広く親しまれた物語であったようで、様々な異本文による多くの写本が知られるが、それらの物語の筋立てや登場人物には大きな相違はない。典型的な継子いじめ型の内容である。不遇な境遇にある女性を主人公とした恋愛物語は人気が高く、女性を読者層として発展した御伽草子には多くの類似の物語があり、古くに成立した本物語の影響力の大きさが知られる。

本絵巻は、本格的な絵師によるとは言えない稚拙さが感じられる描写でありながら、独特の表情や情感を示す温和な画風を示し、画中にも詞書が書き入れられる点に特色がある。鮮やかな色彩や装束の文様、屏風や襖に描かれる花鳥図には、装飾性を意識した絵師の嗜好もうかがえる。こうした絵巻は、御伽草子系の絵巻と言われるもので室町時代以降に多く制作された。

物語の内容は以下の通り。中納言で左衛門督を兼ねた公卿には、先帝の姫宮との間に生まれた美しい姫（姫君）がいた。姫宮が亡くなって後は、公卿と諸大夫の娘との間に生まれた中の君、三の君と共に、その継母に育てられる。時に、四位少将が姫君の美貌の噂を聞いて求婚したが、継母は自分の娘の婿にしようと画策して成功する。しかし、やがて人違いと知った少将は、正月に三人の姫たちが嵯峨野へ野遊びに出かけた折、松の木陰から姫君を垣間見て、恋心を募らせる。一方で、中納言は姫君を入内させようと準備を進めていたが、これもまた継母が妨げる。そして、七十歳の主計頭に姫君を盗ませようとも画策する。姫君は、住吉に住む故母宮の乳母を頼って屋敷を逃れる。姫君の失踪を知った少将は、初瀬観音に祈願したところ、夢で姫君の居所を知り、住吉に訪ねて再会し、京に連れ帰る。姫君は少将と結ばれて末永く栄えた。

詞が画中に書かれる形式の絵巻は室町期に特徴的なもので、享受者が絵場面の鑑賞に留まらず、絵の内容に関心を示して絵巻を鑑賞していることを示している。と同時に、絵巻の発展は、人々が物語を様々に愉しむ方法を工夫して創っていった様子も示している。

少将、松の木陰に姫君をかいまみる　巻上

をくり（小栗判官絵巻）

伝 岩佐又兵衛　十五巻のうち　紙本着色　江戸時代（十七世紀）

表紙の題せんに「をく里」と記される本絵巻の物語は、中世に常陸国小栗御厨を治めていた小栗氏にまつわる伝説を源とし、その伝説は縁ある時宗総本山遊行寺の聖らが念仏を唱えて教義を説き歩く中で語られたものであった。その語りは、より人々の関心と理解を促すために音曲と結びつき、また主人公の小栗判官と照手姫の恋愛物語を中心として加飾されて親しみ易くされ、説教節の一つとして広く流布することとなった。そして江戸時代には、人形操にも取り上げられて人気の演目ともなり、さらに歌舞伎へと発展した。語り口調で展開することが大きな特徴である本絵巻の詞書は、十七世紀前半に浄瑠璃操と共に隆盛した説教操の正本を用いていると考えられ、説教節『小栗判官』を伝えるものとしては、その内容を完備する最も古い形態を示しているとされる。

絵巻の現状は全十五巻。一紙の寸法は、概ね、縦三三・八〜三四・〇センチ×幅九四・〇〜九七・〇センチで、巻第一〜四は十三紙が継がれて約一二・五メートル、巻第五〜十五はその倍の二十六紙が継がれて約二十五メートル、総紙数は三百三十八紙、総長は約三百二十四メートルに及ぶ。説教節『小栗判官』の正本（テキスト）に基づいて絵画化された段数（場面数）は全三百十二段、詞書の行数はのべ三千二百八十五行である。このうち、巻第五以降の十一巻分については、第十三紙と第十四紙の継目で本来は別巻になっていたことが分かっており、当初は各巻が十三紙、約十二・五メートルにそろえられた全二十六巻からなる絵巻であった。絵巻の内容は、主人公小栗と照手姫（照手）が数奇な運命のもと苦難を乗り越えて幸せをつかみ、最後は神仏となって祀られることを説いて終わる物語で、仏教的な教えが多々含まれる。各巻の概略は次の様に展開する。

〔巻第一〕京の公卿・二条兼家は、跡継ぎに恵まれなかったことから、御台を鞍馬寺に参詣させる。そこで毘沙門天より子を授かるとの夢告を受け、十か月後、無事に男児が誕生した。男児は有若と名付けられて大切に育てられた。

〔巻第二〕有若は学問の修得に優れ、十八歳となる。兼家は有若を石清水八幡宮で元服させ、名を小栗と改めて常陸国を知行とした。母は小栗に御台を迎えようとするが、小栗は何かにつけて気に入らず、三年間に七十二人もの御台を迎えては返してしまった。小栗は定まる妻を娶りたいと祈願のため、鞍馬寺に参詣するが、その途中、深泥池の畔で横笛を吹く小栗の姿を、池の大蛇に見初められる。

〔巻第三〕美しい若い姫に変化して現れた大蛇に惑わされた小栗は、大蛇を館に連れ帰り、契りを交わしてしまう。その噂が京中に広まったため、兼家は小栗を知行地の常陸へ遠ざけた。常陸では、地侍たちが毘沙門天の申し子である高貴なお方と小栗を敬って判官とし、仕える。ある日、後藤左衛門という商人が小栗の館に訪ね来て、諸国を幾度も巡り歩いたと話すので、小栗の家来が小栗の妻に相応しい姫がどこかにいないかと尋ねる。

〔巻第四〕そこで左衛門は、武蔵・相模の両国を支配する横山という郡代の一人娘で、日光山参詣の申し子である美しい照手の話をする。小栗は照手への恋文をしたためて左衛門に託す。左衛門はこの恋文を照手のもとに届けた。

〔巻第五〕難解な恋文にためらっていた照手であったが、返書をしたためて左衛門に託す。その返書を受けとった小栗は、照手の了承を得たと喜び、横山の許し無く婿入りを決め、選りすぐった家来を連れて照手のもとへ向かい、二人は結ばれる。

〔巻第六〕このことを知って怒った横山は、三男の三郎の企てのまま小栗を酒宴に招いて人を食い殺す荒馬・鬼鹿毛に乗馬することを勧めて、そのまま犠牲とすることとした。しかし、小栗は鬼鹿毛のつらい状況を察して、その死後は馬頭観音として祀ることを約束し、鬼鹿毛を従わせる。

〔巻第七〕鬼鹿毛に乗馬した小栗は、梯子を登って主殿の屋根を駈けたり、松の木に乗り上げたり、碁盤に乗るなど、曲芸的な技を披露して、鬼鹿毛を乗りこなす様子を横山一同に見せつける。横山と家来はさらなる企てを相談をして、蓬莱山の宴を催して、小栗を毒殺する計画をたてた。

〔巻第八〕横山の招待を幾度も断った小栗であったが、七度目にとうとう承知する。照手は不吉な夢を見たので出かけないで欲しいと願うが、小栗は夢違の呪文を唱えて出かける。用心を重ねて飲酒を断り続ける小栗であったが、とうとう、毒酒を飲まされ、二十一

歳で絶命する。横山は占いによって小栗を土葬し、家来は火葬にした。そして、娘の照手も相模川に沈めようとする。

〔巻第九〕横山の命を受けた鬼王と鬼次の兄弟は、牢輿に乗せられた照手を沈める決断が出来ず、相模川に流す。牢輿の中で観音経を唱えていた照手は観音の慈悲でゆきとせが浦に漂着し、漁夫の長に助けられる。しかし、その美しさに嫉妬した長の妻は、照手を商人に売ってしまう。照手は売られ売られて能登半島にまで行き着く。

〔巻第十〕照手はさらに金沢から敦賀、大津と売られ行き、美濃国青墓の宿、万屋の君の長のもとへ売られ着いた。君の長は照手に常陸小萩と名付けて遊女の務めを命ずるが、照手はそれを断り水仕事を選ぶ。休む暇なくこき使われる照手は常に千手観音の加護を受け、三年の月日が経つ。一方の小栗は、閻魔大王の前に引き出されて裁かれる。

〔巻第十一〕小栗は娑婆に戻されることになった。閻魔大王は、「この者を藤沢の上人に渡すので、熊野本宮の湯の峯に入れてやればもとの姿に戻れるだろう」と胸札に書き記し、杖で虚空を打った。築かれてから三年が経つ小栗塚が割れ、餓鬼姿の小栗がそこから這い出て来た。その小栗を見つけた藤沢の上人は、横山一門に知れることを懸念して、小栗の髪を剃り、餓鬼阿弥と名付けた。そして閻魔大王自筆の胸札を読み、「この者を一引きすれば千僧供養、二引きすれば万僧供養」と胸札に書き添え、作った土車に餓鬼阿弥を乗せ、熊野を目指し上人自ら手綱を引いて出発した。相模畷では、横山家中の侍たちが照手の供養にとこの土車を引く。餓鬼阿弥は東海道沿いに諸国を引かれ続けて行く。

〔巻第十二〕餓鬼阿弥の土車は静岡からさらに西へと引かれ続け、美濃国青墓の宿で照手と出会う。照手は亡き夫の供養のためと、五日間の暇をもらい、狂女の姿に擬して土車を引き、彦根まで行く。

〔巻第十三〕照手はさらに餓鬼阿弥を引き行き、大津に着く。関寺の門前で「本復されたら、美濃国青墓宿の君の長の館に、常陸小萩という者をお尋ね下さい」と胸札に書き添え、餓鬼阿弥と別れる。餓鬼阿弥はさらに京から天王寺、住吉を経て紀州国内を大峯山まで引かれた。そして大峯山では、山伏に背負われて山を登り、四百四十四日目に熊野本宮の湯の峯に入った。効能豊かな湯に入って、七日目には両眼が開き、十四日目には耳が聞こえ、二十一日目には口がきけるようになり、四十九日目に元の小栗の姿に戻った。小栗は熊野三山で修業に入るが、山人に化身した熊野権現より運を開くという金剛杖を受ける。その杖を持って、小栗は京へ向かった。

〔巻第十四〕京で両親との再会を果たした小栗は、帝より美濃国を与えられた。そして美濃国に赴き、照手と感動の再会を果たす。

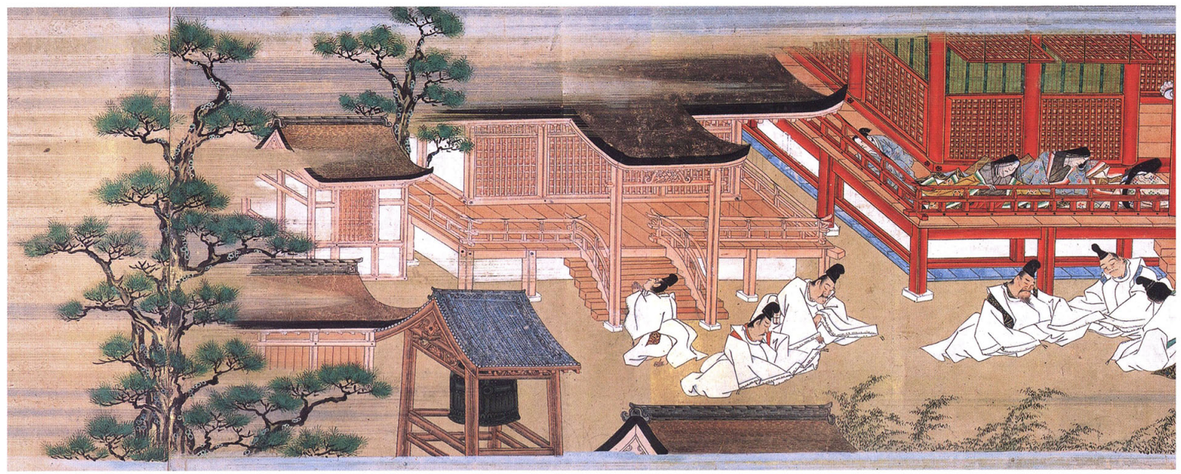
〔巻第十五〕照手に対する君の長の扱いを知って激怒する小栗を、照手は取りなし、むしろ褒美を所望したので、小栗は君の長に美濃国の領地を与える。照手と共に常陸国に戻った小栗は横山を攻めると告げるが、照手の父への逆罪の嘆きに免じて横山を許す。横山は子に勝る宝はないことを思い知り、黄金を鬼鹿毛に積んで小栗のもとへ送った。鬼鹿毛は馬頭観音として祀られる。小栗は大きな屋敷を構えて二代にわたって富み栄え、八十三歳で大往生した。没後は、美濃国安八郡墨俣、垂井の八幡社に祀られた。また照手はその近くに、縁結びの神として祀られている。

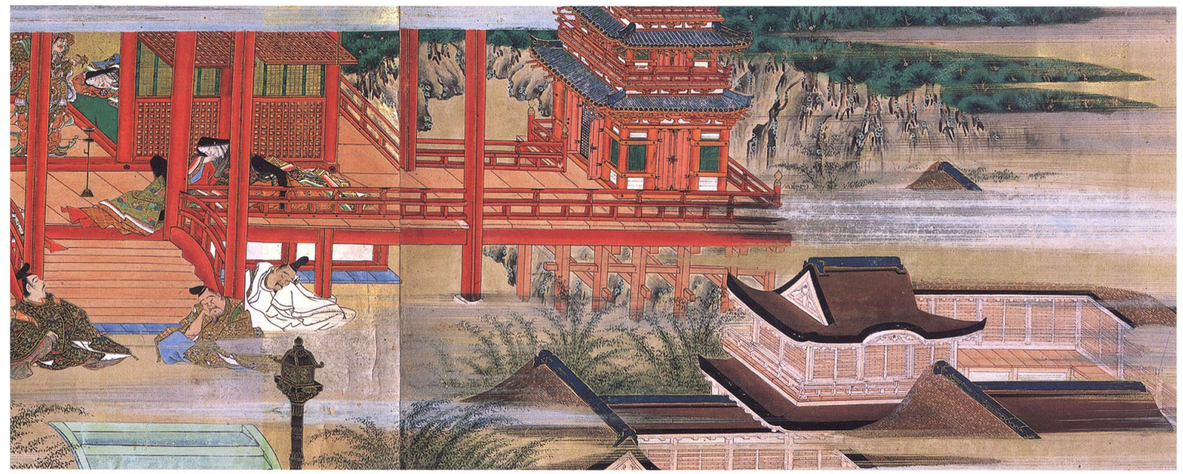
この絵巻制作を担当したのは、十七世紀前半に、京、福井、そして江戸で活躍した岩佐又兵衛（一五七八〜一六五〇）と伝えられる。絵巻に落款印章を伴わないが、豊頬長頤の顔貌、手や足先が反り、衣の裾先が翻るなどの特徴は、いわゆる〝又兵衛風〟と呼ばれる画風を示しており、岩佐又兵衛とその工房で制作されたものと考えて良かろう。

絵巻の場面は、ストーリーが細かく展開し、アニメーションを見るかのようでもある。〝又兵衛風〟の特徴的な画風が絵巻全体に表れ、その展開は躍動感に溢れる。しかし、描線が細く柔軟で伸びやかに描かれている場面もあれば、たどたどしい筆線でこじんまりとまとまったような印象を受ける場面もあり、画風は一様でない。こうした描写表現の様子は、他の古浄瑠璃絵巻群―又兵衛工房が関わって制作されたと考えられる華麗で長大な絵巻。「山中常盤」（MOA美術館）、「堀江物語（残欠本）」（香雪美術館ほか分蔵）などがある―と同様で、全体には又兵衛風の画風の特徴を備えながら画風には複数の個性が認められてばらつきがあることは、複数の絵師の存在を明らかに示し、大規模な工房における制作であることをうかがわせる

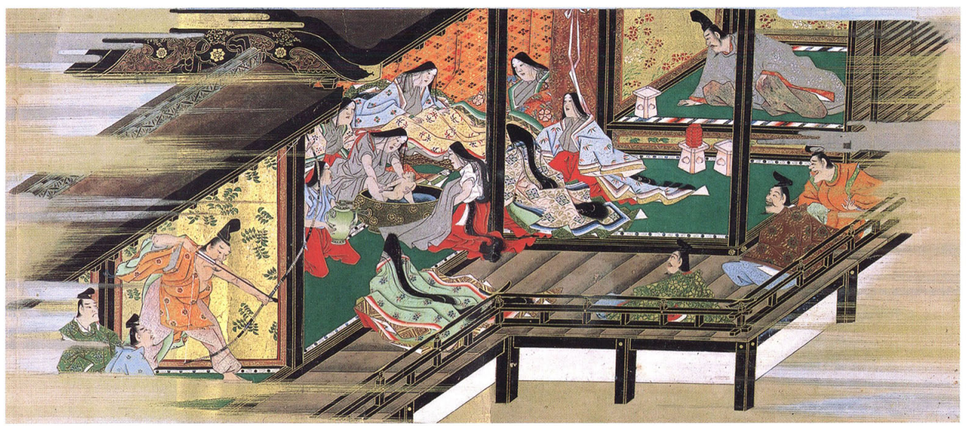
また、詞書部分は金銀泥によって様々な植物や鳥、海浜や吉祥をテーマとした装飾画が描かれ、金銀泥による繊細な雲霞を加えて、絵部分を主体に引かれる白群のすやり霞と共に、装飾性と叙情性を高めている。さらに、表紙として飾り付けられた裂は、地を縹色の繻子地とし、萌黄、白、紅、紫、茶の緯糸を浮かして亀甲花菱文に向鶴丸文を表したもの。また見返しと軸巻紙には、紗綾形文の金箔型押しの装飾紙が用いられている。さらに表紙裂左端上部に貼り付けられる題せんには、截金で三重襷の文様が表されており、こうした絵巻全体の華麗な装飾は、絵巻が大名等の高位の人の求めに応じて制作されたであろうことを示している。

本絵巻は、明治二十八年（一八九五）一月、日清戦争の折に広島大本営に前年より逗留されていた明治天皇に、岡山藩家老を務めた片桐池田家第十一代当主・池田長準が御前で披露し、後に献上した作品である。



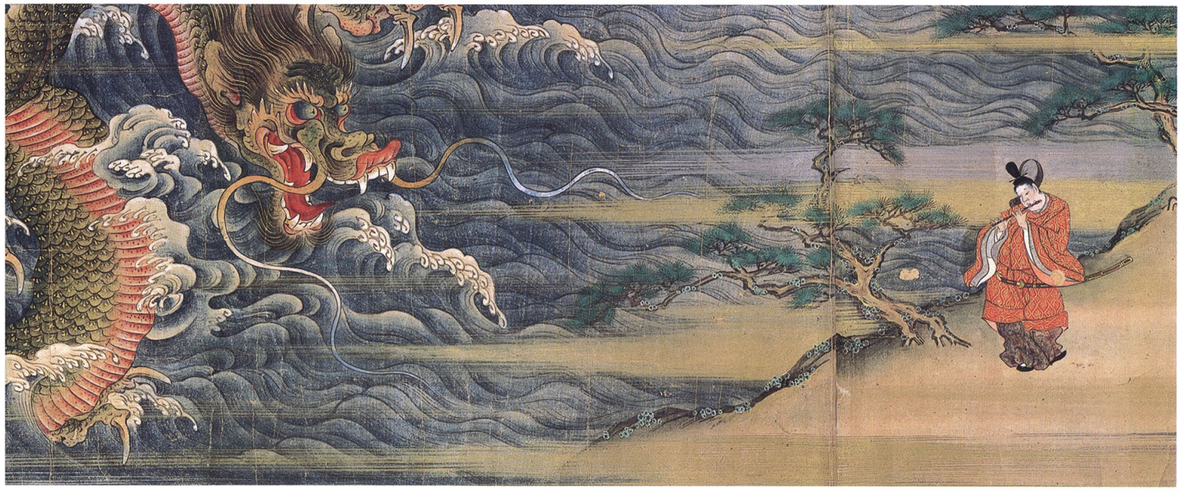


二条兼家の妻は鞍馬寺に参詣し、毘沙門天の夢告を得る　第1巻 第3段



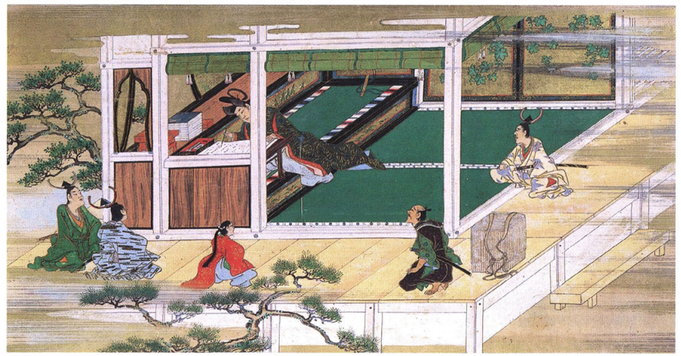
若君に産湯をとらせて鳴弦をする　第1巻 第6段

若君の誕生　第1巻 第5段



深泥池の大蛇が小栗を見初める　第2巻 第9段

照手は文を読み、自分宛の恋文と知る　第5巻 第2段

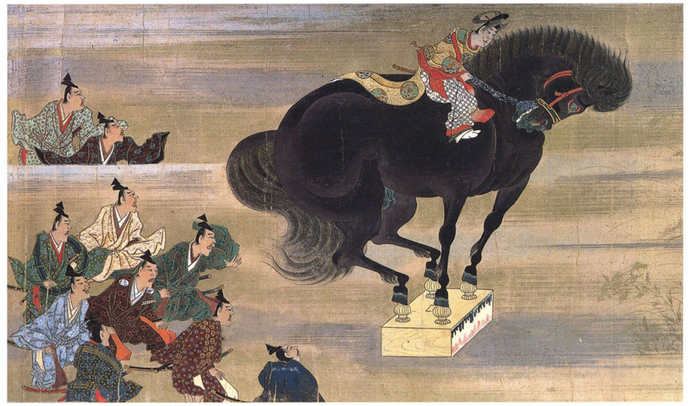


小栗は照手へ恋文を書く　第4巻 第3段

小栗は横山に許しなく婿入りし、照手と結ばれる　第5巻 第18段

小栗が荒馬の鬼鹿毛を乗りこなす様子を見て、横山の家来たちは驚く　第7巻 第3段

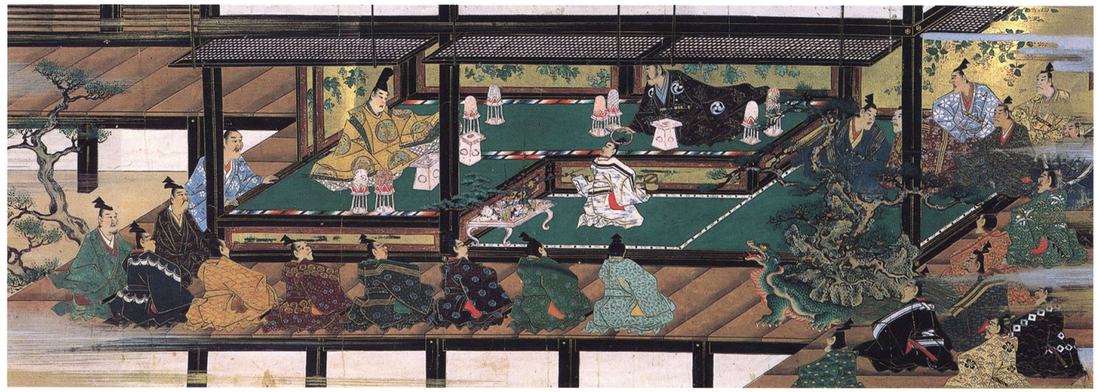
小栗は鬼鹿毛を松の木に乗り上げる　第7巻 第7段



小栗は鬼鹿毛を碁盤の足の上に乗せる　第7巻 第9段

横山の酒宴に招かれた小栗に、照手は小栗一行が死装束で北に向かう不吉な夢を見た話をする　第8巻 第9段

小栗は夢違の呪文を唱える　第8巻 第10段



小栗は横山の飲酒のすすめに、来宮信仰の日なのでと断る　第8巻 第12段

小栗らは毒酒によって次々に倒れ死ぬ　第8巻 第17段

横山は小栗を土葬に、家来を火葬にする　第8巻 第20段

照手は相模川のおりからが淵に沈められることとなる　第9巻 第2段

難を逃れた照手は商人に売られていく―よしはら、さまたけ、りんかうし、宮の腰　第10巻 第1～2段

もとをりこまつ

毒殺された小栗と家来は閻魔大王のもとへ送られる　第10巻 第19段

大王は小栗を娑婆に戻すため、杖で虚空を打つ　第11巻 第2段

大王は、娑婆へ戻す小栗の胸札に藤沢の上人へのことづてを書く　第11巻 第1段

藤沢の上人は上野が原で餓鬼姿の小栗を見つける　第11巻 第4段

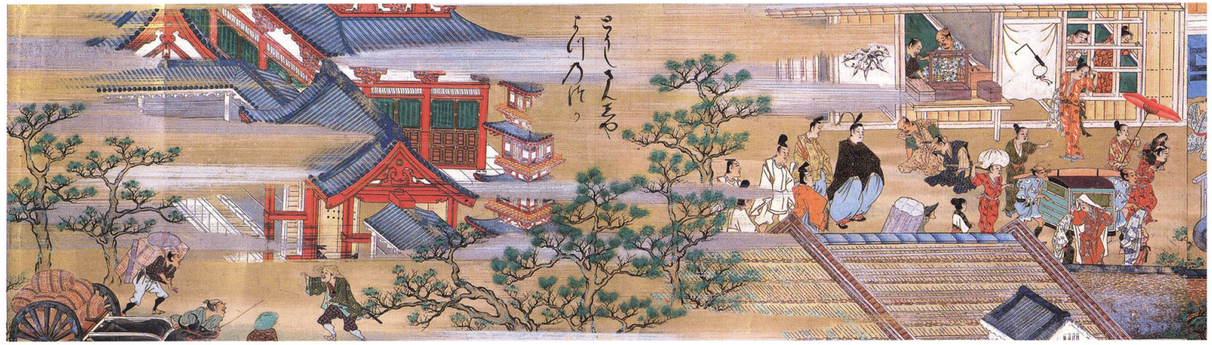
相模畷では、横山家中の侍も照手の供養にと車を引いた　第11巻 第7段

餓鬼阿弥の道中―吉原　第11巻 第18～19段

富士の裾野

餓鬼阿弥は美濃国青墓の宿で照手に見つけられ、照手は小栗の供養に車を引きたいと希望する　第12巻 第36段

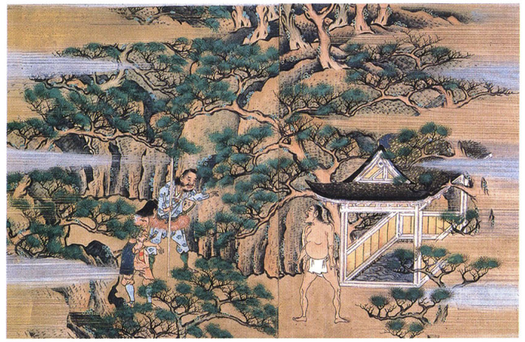
餓鬼阿弥と照手の道中―瀬田の唐橋　第13巻 第5段



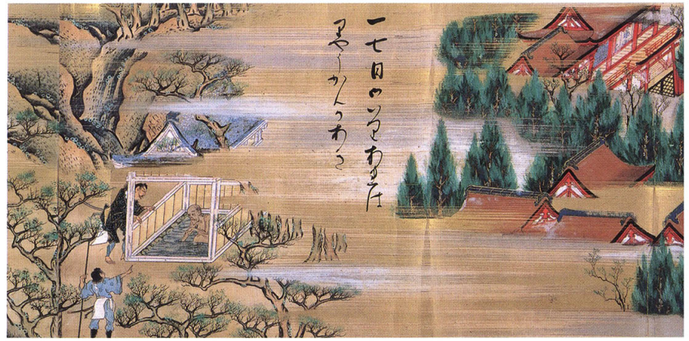
東寺、さんしや、四つの塚

餓鬼阿弥の道中―京　第13巻 第15～16段

照手は、本復の後は常陸小萩を訪ねるよう、胸札に書き添える　第13巻 第10段



餓鬼阿弥は四十九日目にもとの小栗の姿に戻った　第13巻 第37段

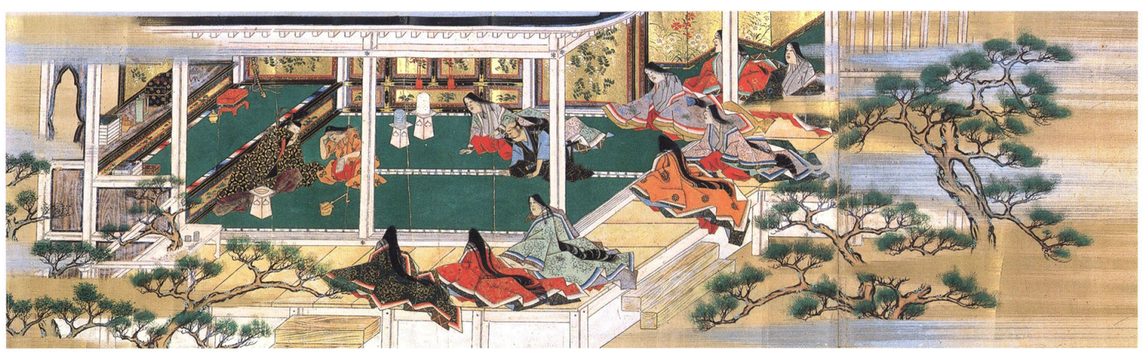


七日目には両眼が開いた

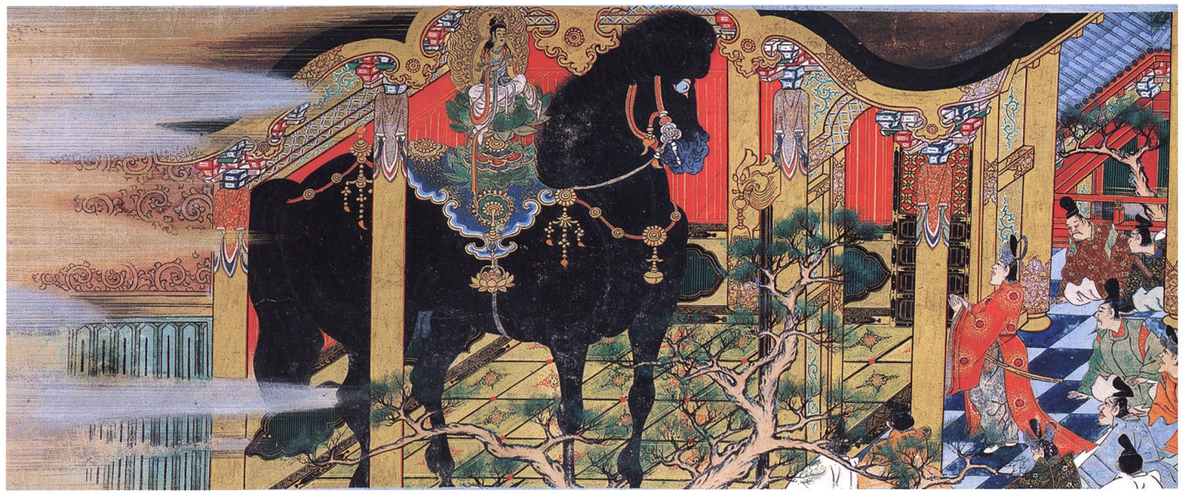
第13巻 第34～35段
餓鬼阿弥は四百四十四日目に熊野本宮湯の峯に入る

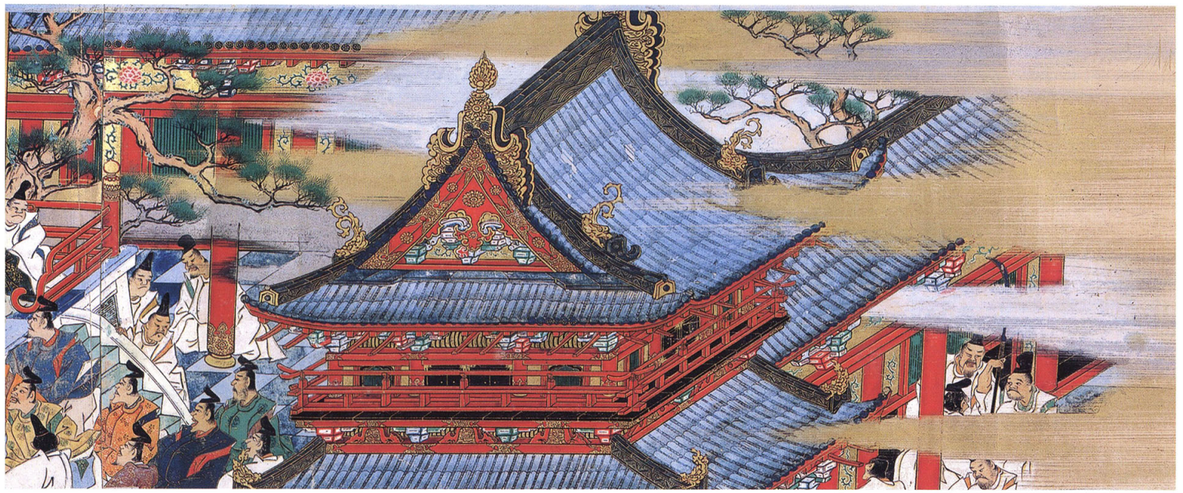
餓鬼阿弥は大峯山中を山伏に背負われて進む　第13巻 第33段

小栗は、照手が父への逆罪を嘆いたので、照手に免じて横山を許す　第15巻 第6段



小栗と照手は互いと分かって、逢えたうれしさのあまりに号泣する　第14巻 第20段





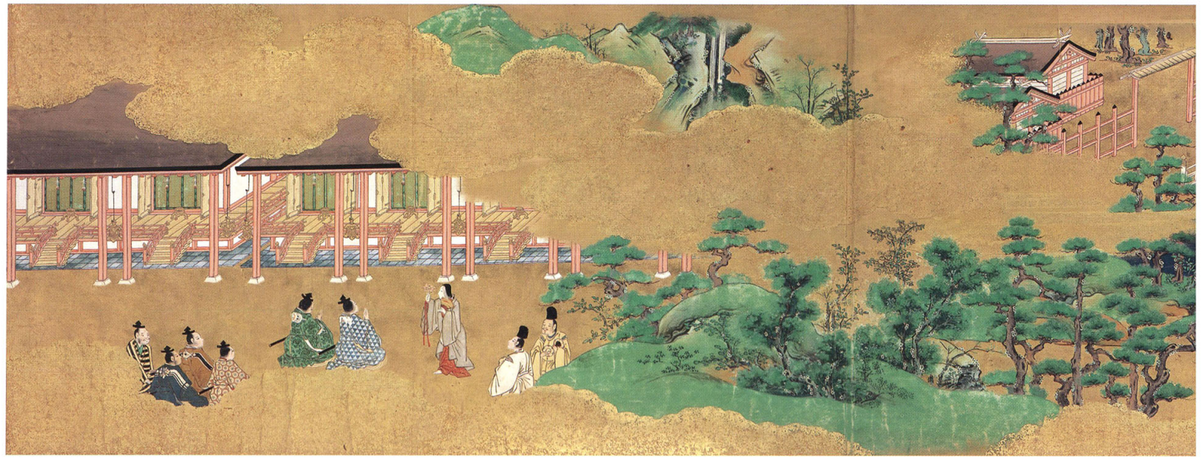
小栗は横山が送ってきた黄金で御堂と寺を建て、鬼鹿毛を馬頭観音として祀る　第15巻 第11段

小栗は常陸国で富み栄え、八十三歳で大往生する　第15巻 第16段

小栗は往生して、あらゆる神仏に供養される　第15巻 第17段

照手も近くに縁結びの神として祀られる　第15巻 第19段

小栗は美濃国の垂井のおなこと社に神として祀られる　第15巻 第18段



頼光らはそれぞれに八幡、住吉、熊野に参詣して、鬼退治の成功を祈願する　第1巻 第5段

酒伝童子絵巻

五巻のうち　紙本着色　江戸時代（十七世紀）

平安時代の武将、源頼光（よりみつ）（九四八～一〇二二）は、後に優れた武人として、様々な武勇伝が語られた人物である。実際には、但馬等の受領を歴任し、内蔵頭、左馬権頭、東宮権亮等を務めた。受領歴任で蓄えた財力で、道長の土御門殿新造の折の調度の品々の一切を負担するなど、藤原摂関家に接近して勢力を拡大し、後の清和源氏発展の基礎を築いたが、その武勇伝は伝説の域を出ない。

頼光や、彼の郎党と伝えられる渡辺綱、坂田公時、碓井貞光、卜部末竹の頼光四天王の名は、『今昔物語集』をはじめとする多くの説話集や軍記物の中に見出すことが出来、早くからその武勇が語られていたことが分かる。その武勇伝には、大江山の鬼退治として知られ、御伽草子によって広く普及、本絵巻の題材にもなっている『酒呑（伝）童子』（能の『大江山』も同）、『平家物語』剣巻の山蜘蛛退治を題材とした《土蜘蛛草紙》がある。

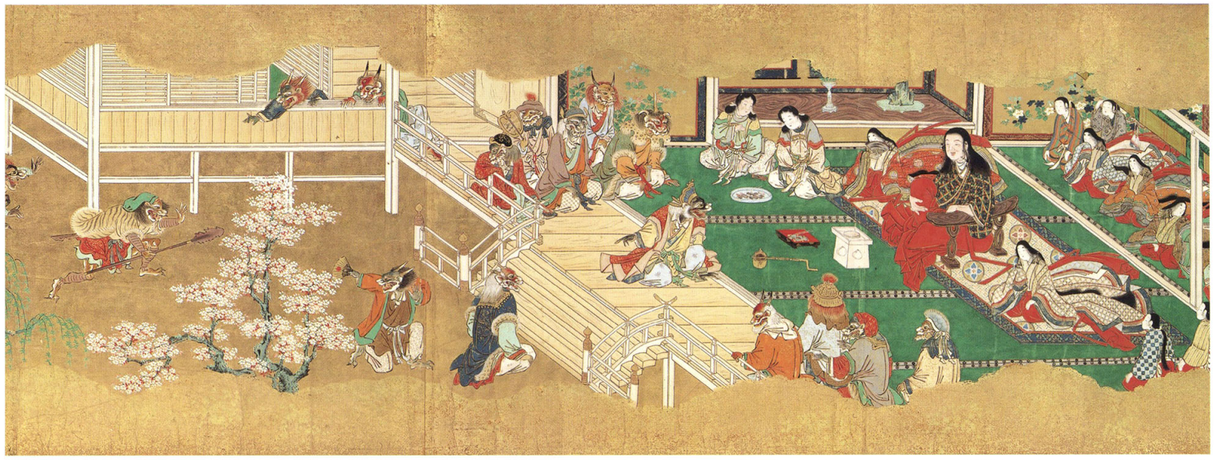
さて、本絵巻は、伊吹山系の作品で、狩野元信による三巻本の内容を受けて制作されたものである。詞書、絵場面共に金を多用し、鮮やかな色彩で描く豪華な絵巻である。画風から、その制作は京狩野に連なる絵師によるものと推察され、類似の画風が指摘される石山寺本《源氏物語絵巻　末摘花》等の絵巻群よりは先行する、十七世紀半ばよりやや早い頃の作例かと考えられる。その豪華さから、本絵巻は大名クラスの高位者からの依頼によって制作されたものであろう。物語の展開は次のようである。

一条天皇の時代、京で若く美しい女房が姿を消すという事件が相次いで起こった。池田中納言の一人娘もある夜姿を消してしまう。中納言は京で評判の清明の占いによって、事件は近江伊吹山の千丈ヶ嶽に住む鬼の仕業と知り、源頼光に討たせることとした。そして勅命を受けた頼光は、藤原保昌と家来の四天王と共に、八幡社や住吉社等に加護を祈願した後、山伏姿に変装して、伊吹山を目指して出発した。鬼の館に着いた頼光一行は、童子姿の鬼と対面し、自分たちは出羽国羽黒山の山伏であると名乗る。そして、童子に怪しまれないように人血酒や人肉のもてなしを受け、返礼に毒酒を勧めて舞い踊る。やがて童子は酔いつぶれて寝所に戻り、眷属の鬼たちも倒れ伏した。頼光らは二人の女房に童子の寝所に案内され、鬼の姿で横たわる童子の首を掻き切る。そして、眷属の鬼たちを次々に倒して、岩屋にとらわれていた中納言の娘たちを救い出し、京に連れ帰った。物語の最後は、頼光らの偉業を讃え、これらは神仏の加護によるものと締めくくる。

絵巻は、元信本の描写を受けて再構成されているが、頼光をはじめとする登場人物の表情や細緻で美しい装束の文様、屏風などの調度の品々の見事な描写、架空の鬼の豊かな描写など、美しさと共に、観る者が画面に描かれた様々な描写を愉しめる。描写の細緻さ、美しさが、豊かなイメージを膨らませているとも言えよう。

本絵巻は、日清戦争の折の明治二十七年、広島大本営に御逗留中の明治天皇に、因州池田家当主、池田仲博より献上された作品である。

頼光らはそれぞれの武具を笈に入れ、出立の準備をする　第1巻 第6段



酒伝童子の館内。都よりさらってきた女房を侍らせ、多くの眷属を従え、四方四角には春夏秋冬を飾っている　第2巻 第7段

頼光一行、酒伝童子の寝所を襲い、討ち果たす　第4巻 第4段

頼光一行、童子の首と助けた女たちを連れ、都に凱旋する　第5巻 第6段

彦火々出見尊絵巻

六巻のうち　紙本着色　江戸時代（十七世紀）

山幸彦こと彦火々出見尊と、海幸彦こと火闌降命の記紀神話を題材にした絵巻。全六巻で、各巻の概要は以下の通りである。

〔巻一〕彦火々出見尊は、兄の火闌降命に頼み込んで釣針を借り海へ出たものの、大きな魚に針を持っていかれてしまった。火闌降命は激怒し、釣針をなくした彦火々出見尊を厳しく責め立てた。途方に暮れて浜辺を歩いていた尊は一人の翁に出会う。

〔巻二〕尊から事情を聞いた翁は、自分が釣針を探すので篭に乗って目をつぶるように言う。しばらくして目を開けると、壮麗な宮殿が眼前にそびえていた。門にいる美しい女に問われた尊が、「葦原日本の尊」であることを告げると門の中へ通され、尊は龍王と対面する。

〔巻三〕尊が釣針をなくして困り果てていることを知り、龍王は国内にお達しを出して釣針がのどに刺さった者を探し出した。見ると確かに尊が失った釣針であった。無事釣針を取り戻した尊は、龍王からの願いもあって龍王の娘のもとに婿入りをすることとなる。

〔巻四〕しばらくして姫君は懐妊した。そして尊が龍王に釣針を兄に返しに行く意志を伝えると、龍王は潮満の玉と潮干の玉という二つの玉を尊に渡し、それで兄を懲らしめるように助言した。尊は国元に帰り、兄に釣針を返した。

〔巻五〕尊が龍王より渡された潮満の玉を振ると、突如兄の周りに水が湧き出た。溺れた兄はたまらず許しを請い、孫子の代まで尊に貢ぎ物をすることを誓った。それを聞いた尊が潮干の玉を振ると水は引いた。目的を果たした尊は再び龍王宮へと帰った。

〔巻六〕龍王宮に帰還した尊はその一部始終を龍王に報告した。姫君の出産が近づくと、龍王宮ではなく尊の故郷で産むべきだということになり、橋を架け渡してその浜に産屋が設けられた。産屋の屋根に鸕鷀の羽を葺くことになったがすべて葺き終わる前に子供が産まれたため、その子は鸕鷀羽葺不合尊と名付けられた。その後尊は帝位につき、その兄は大和国吉野郡の庄園を営み、かつて誓った通り節会ごとに弟の尊へ貢ぎ物を奉じた。

本絵巻は江戸時代に制作された優れた模本である。その原本と思われる絵巻は、室町時代、後崇光院（伏見宮貞成親王）が記した日記『看聞御記』に登場する。それによれば、嘉吉元年（一四四一）に院は、若狭国松永庄（現在の福井県小浜市）の新八幡宮より絵巻を取り寄せ、内裏へ持参して後花園天皇（後崇光院の第二皇子）に披露した。そこで叡覧に供したのが、いまなお名品として伝わる《伴大納言絵詞》（出光美術館蔵）と《吉備大臣入唐絵巻》（ボストン美術館蔵）、そして現存不明の《彦火々出見尊絵巻》という三つの絵巻であった。この《彦火々出見尊絵巻》は、《伴大納言絵詞》と同様に後白河院の命により、十二世紀半ばに活躍した宮廷絵師常磐源二光長周辺で制作されたものと考えられている。この絵巻はいつしか新八幡宮から同じく松永庄の明通寺へと移され、小浜藩主の酒井忠勝から将軍家光へと献上されたところまでが記録に残されている。『看聞御記』では二巻と記載されている《彦火々出見尊絵巻》は、その後仕立て直されたのか、酒井忠勝が献上する際の記録では全三巻と記されている。献上に先立ち、忠勝は狩野種泰に六巻仕立ての模本を制作させ、それは現在も明通寺に伝わっている（以下、明通寺本と称す）。模写を行った狩野種泰は、前田家に仕え金沢に住していた狩野友益氏信と考えられている。

そして当館所蔵の本絵巻も、この明通寺本と同様に全六巻から成り、おそらく明通寺本とさほど隔たらない時期に制作されたものと思われる。両本を比較すると、随所に散らされた貝殻一枚一枚の位置や岩塊の皴（岩肌の質感を表す描線）の入れ方など、非常に細かい部分まで描写が一致していることが分かる。しかし明通寺本では第六巻の巻末に狩野種泰の落款印章が認められるのに対し、本絵巻はいずれの巻にも絵師の手掛かりを示すものはない。その代わり、本絵巻の収納箱の蓋裏には次のように詞書筆者の名が記されている。

筆者／第一　廣幡大納言忠幸卿／第二　油小路前大納言隆貞卿／第三　清閑寺中納言凞房卿／第四　千種前宰相有能卿／第五　勘解由小路治部大輔資忠朝臣／第六　持明院中将基時朝臣／外題　中院大納言通茂卿

ここに列記された七人はいずれも江戸時代前期の公卿である。その中で最も早くに没した広幡忠幸の寛文九年（一六六九）が制作の下限に設定でき、それぞれの官位などからして本絵巻の制作は、おそらくその前の十年以内と推定され、明通寺本からは十年から二十年程度遅れて制作されたことになる。肝心の絵巻の画風であるが、描写技術は明通寺本と比べても遜色がなく、むしろ彩色に関しては本絵巻の方がより鮮やかかつ繊細な陰影が施される。また描線も薄墨を用いて柔らかなタッチでひかれて、全体的に明通寺本よりも柔和で華やかな印象を受ける。

両絵巻の巻数や各巻の構成は同様であるが、用いられた紙の大きさが異なるため、一巻当たりの紙の枚数や紙継の位置までは一致していない。ただし本絵巻は、

紙継の何箇所かにひとつはおそらく意図的に明通寺本と紙継位置を揃えている。それだけではなく、興味深いことに本絵巻の画面内には、明通寺本の紙継にあたる位置にうっすらとアタリをつけたと思しき線がいくつか認められる。こうした点から本絵巻は、常磐光長周辺の作とされる原本絵巻を直接模写したものではなく、明通寺本を元にして制作された模本である可能性が高い。明通寺本では紙継の部分で図様がややずれていたり、本紙が切り詰められたため図様が断絶している箇所が、本絵巻では自然な形に修正されている点も、本絵巻が明通寺本を模写し直したものである証と言えよう。

絵巻の作者に関しては、狩野派絵師によって描かれた明通寺本との画風の相違から、大和絵系統の住吉派の手によるとする指摘もある。たしかに住吉派の絵師が《彦火々出見尊絵巻》を模写した例はいくつか確認できる。結論を急ぐべきではないが、詞書筆者らの顔触れからしても、また発色のよい良質な緑青や群青が用いられている点、そして金襴の表紙など装丁の豪華さからしても、本絵巻が江戸時代前期の宮廷公家社会の中で制作された可能性は高く、当然ながら名のある絵師がその任にあたったものと思われる。

そうした興味深い背景を別にしても、登場人物の喜怒哀楽に富んだ表情や、躍動感のある姿態描写、絢爛豪華な龍王宮の室内風景や調度、そして人々の衣装に見られる装飾性、異時同図法を用いた巧みな場面展開、龍王宮の住人である異形のキャラクター達の造形にみる自由な想像力、そして山海の風物を丁寧に描く繊細な視点とそれによって醸し出される抒情性など、本絵巻からは原本の絵巻が持っていたであろう魅力を充分に感じとることができ、明通寺本と並んで、失われた原本の姿を今に伝える貴重な存在である。

彦火々出見尊、兄の火闌降命に釣針を借りる　第1巻

釣りに出た尊は、兄から借りた釣針を失い途方に暮れる　第1巻

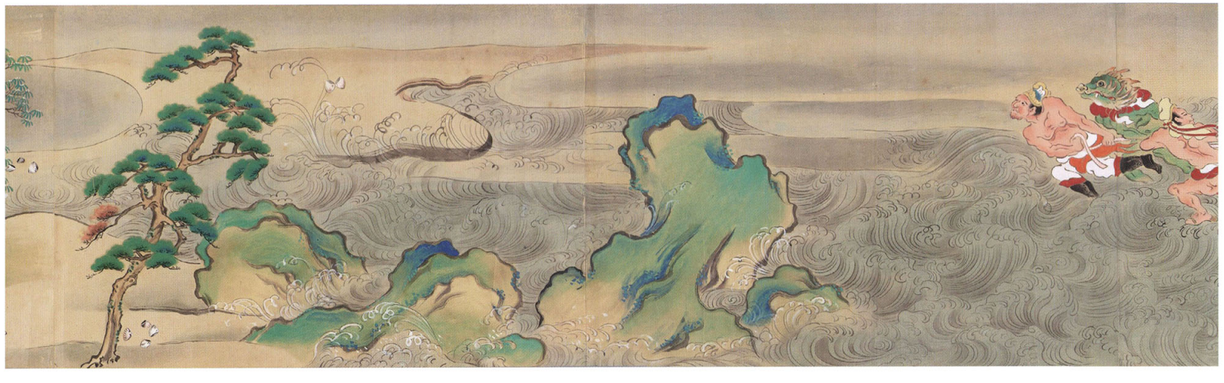
龍王の発令で釣針がのどに刺さった男が探し出され、尊は釣針を取り戻す　第3巻

尊は、婿入りのため龍王の姫君のもとへ向かう　第3巻

尊と姫君の婚礼を祝って龍王宮では盛大な祝宴が催される　第4巻

見つけた釣針を手に尊は龍王宮を出発する

尊は兄の火闌降命に借りていた釣針を返す



龍宮に仕えるものたち

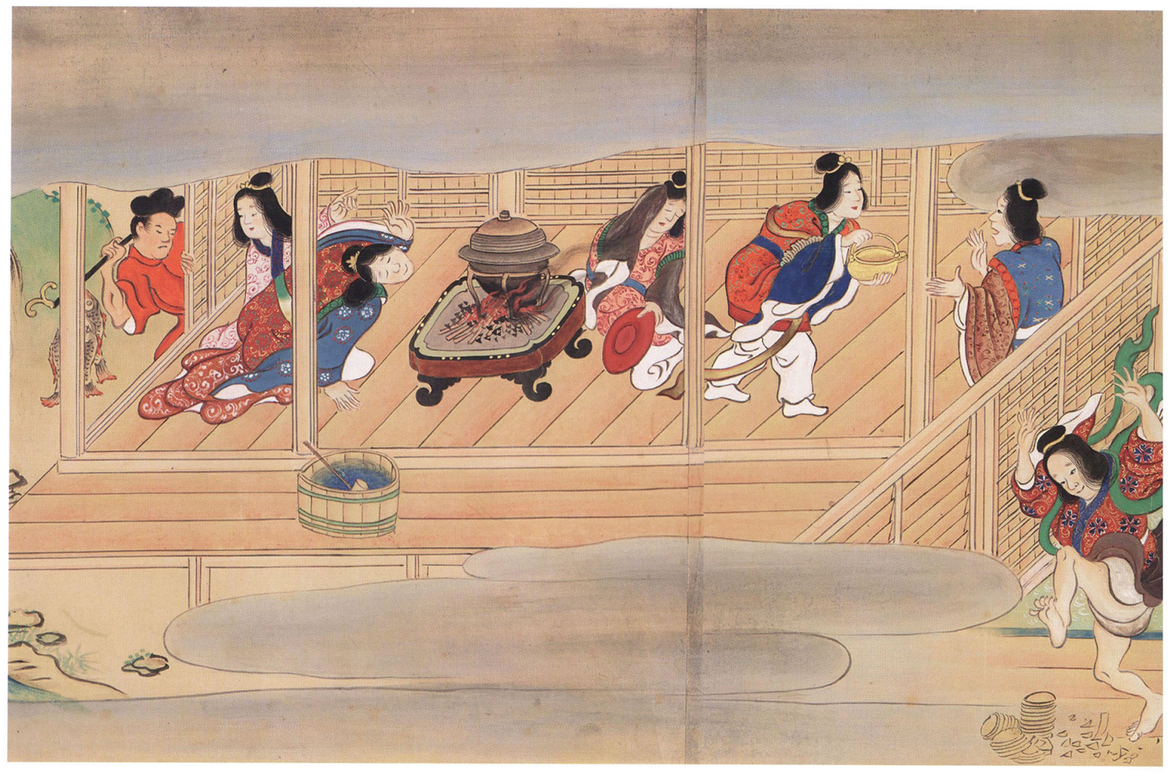
尊の国へ出立した姫君を見送る龍王　第6巻

姫君の船

出産のために尊の国へと向かう姫君一行

浜辺に新造された産屋のもとに続々と龍王の家臣らが到着する

祈祷が執り行われる中で御産する姫君と、その身を案じて屋根裏からのぞく尊　第6巻



若蘭絵巻

仇英　一巻　絹本着色　中国・明時代（十六世紀）

中国には、物語の内容を長大場面に風景や人物を多く取り入れて描き表す画巻がある。これは、日本の絵巻のように、物語的なストーリーをまとまりごとに区切って内容を記した詞書と、その内容を絵画化した絵場面とを繰り返して、連続的にストーリーを展開していく形式のものとは大きく異なる。中国・明時代の作例である本作品にも詞書はないが、回文によってそのストーリーが示されているという興味深い作品である。

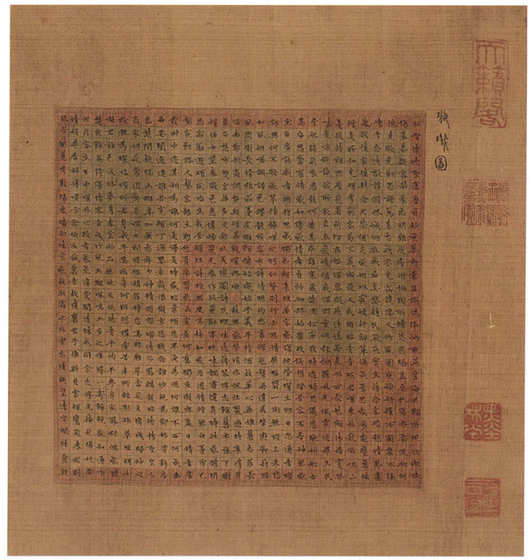
内容は、四世紀中頃の蘇蕙（そけい）（字を若蘭という）という女性にまつわるもので、『晋書』列女伝にその伝が載っている。それによれば、夫の竇滔（とうとう）は前秦の皇帝・苻堅（ふけん）に秦州刺史として仕えていたが、左遷される憂き目に遭う。竇滔が妾の趙陽臺を寵愛するのを嫉み、蘇蕙は夫にさからう。竇滔は襄陽に移ることになった際、趙陽臺のみを連れて行く。残された蘇蕙は夫からの音沙汰が無いことに寂しさを募らせて悔恨し、五色の文錦を織って詩二百余首を題し、竇滔に送った。その詩は、縦横反覆、つまり順に読んでも、逆に読んでも詩となるという巧みなもので、名付けて璇璣図（せんきず）という。その余りにも見事な詩に感動した竇滔は、礼を尽くして蘇蕙を再び迎えた、という。

本絵巻の巻頭には若蘭の肖像が描かれ、その次に璇璣図が示される。二十九字四方の全八百四十字（中央の枡には文字の書き入れが無い）と、その中に組み込まれた四言、五言、六言、七言の詩、四方斜角に詠み込まれた詩は三千五百十八首と記される。夫を慕って詠み、それが逆さから読むことも出来る回文詩になっているという。八百を越える文字が様々に循環、往復して始まりも終わりも無い詩の世界を創り上げているのである。本絵巻の絵場面は、その世界が絵画化され、各一三〇cm程の画面に次の四場面が展開している。

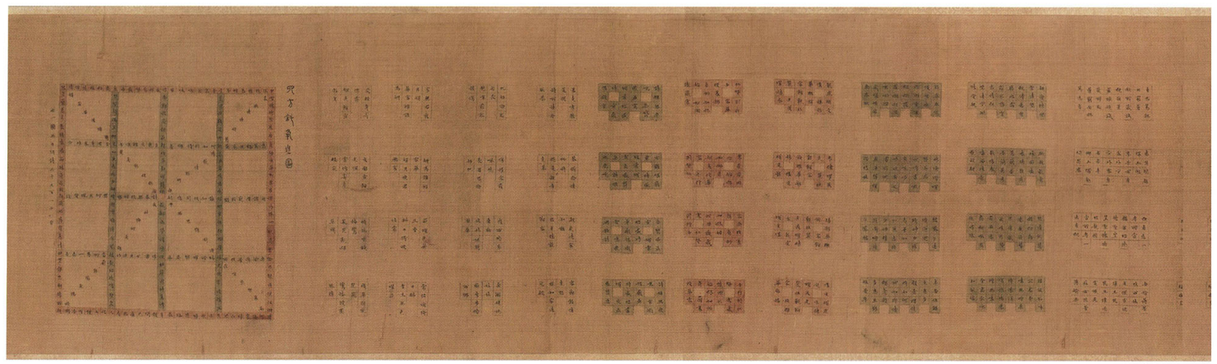
第一場面は若蘭が回文詩を織り込んだ錦を織成している場面、第二場面は完成した織物を夫の元へ届けるよう使いに託している場面、第三場面は届けられた織物を見て感心している夫たち、そして第四場面は若蘭のもとに夫から便りが届き、夫の元へ向かう様子を描く。細緻な描写によって、主人公若蘭らの様子を、豊かな自然や建物、また脇役的人物を配置した景色の中に描き入れた画面は、風景描写、空間の連続性を重視した中国の画巻の特徴を備え、豊かな空間をイメージしている。

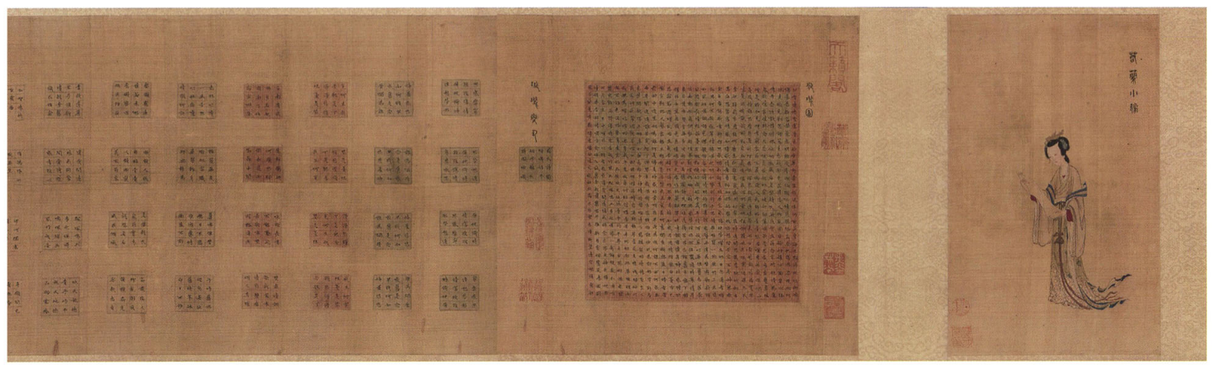
作品は、絵場面の最後の落款印章より、明時代半ばに活躍した仇英（一四九四頃〜一五五二）と知られる。また、巻頭の璇璣図の後にはその由来を記した元時代の女流画家、管道昇（一二六二〜一三一九）が記した識語が記され、巻末には、仇英とほぼ同時期に活躍した画家の王寵（一四九四〜一五三三）らの跋文がある。

若蘭の肖像

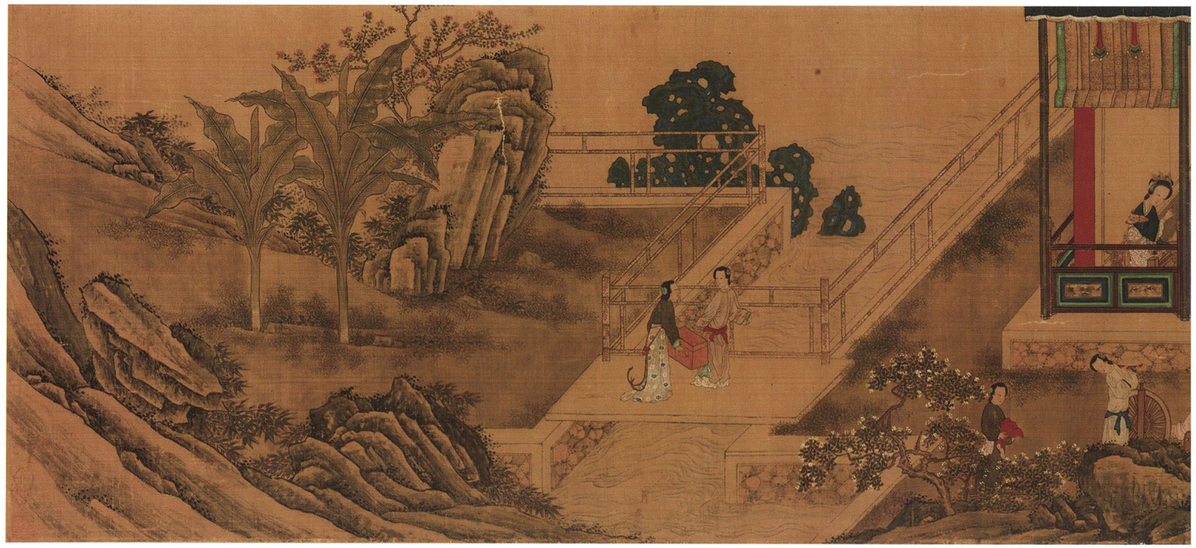


璇璣図





若蘭の肖像と璇璣図　巻頭



若蘭、夫への想いを込めて、詩を錦に織り込む　第一図

若蘭、夫からの手紙を受け取り、夫の元へ向かう　第四図

絵巻を愉しむ ―《をくり》絵巻を中心に
三の丸尚蔵館展覧会図録 No.69

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社 東京美術
翻訳　黒川廣子
発行　宮内庁
平成二十七年七月四日発行

© 2015, The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shozokan

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

絵巻を愉しむ ―《をくり》絵巻を中心に
三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 69

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社 東京美術
翻訳　黒川廣子
発行　宮内庁
平成二十七年七月四日発行

© 2015, The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shozokan

blood wine and human flesh, and in return they danced offering poisoned wine. Eventually, the Doji getting heavily drunk returned to his bedroom, and his retainer ogres also fell down. Raiko's group was lead to the Doji's bedroom by two women, where he was lying down in his ogre form, and cut off his head. Then, they killed each of the retainer ogres, rescued the Chunagon's daughter and the other women captured in a cave, and brought them back to Kyoto. The tale ends with praise towards Raiko's achievements, claiming that they were because of the protection of the gods.

Viewers are able to enjoy the various depictions while expanding their images, with the expressions of the figures, the intricate and beautiful decorative patterns of the robes, the wonderful depictions of various furnishings such as screens, etc., and the brilliant illustrations of the fictional ogre.

彦火々出見尊絵巻

6巻
紙本着色　江戸時代（17世紀）
本紙　巻1：32.3×589.4㎝　巻2：32.4×734.8㎝　巻3：32.3×530.3㎝
巻4：32.4×818.0㎝　巻5：32.3×1118.5㎝　巻6：32.3×1402.4㎝

Illustrated Scrolls of Prince Hikohohodemi-no-mikoto

set of 6 scrolls, color on paper, Edo period, 17th century
area of the paintings - scroll no.1: 32.3×589.4　scroll no.2: 32.4×734.8　scroll no.3: 32.3×530.3
scroll no.4: 32.4×818.0　scroll no.5: 32.3×1118.5　scroll no.6: 32.3×1402.4

A set of illustrated scrolls depicting the myths about Umisachihiko and Yamasachihiko in *Kojiki* (The Records of Ancient Matters) and *Nihonshoki* (Chronicles of Japan). Yamasachihiko, alias Hikohohodemi-no-mikoto, had lost the fishhook that he borrowed from his elder brother Umisachihiko, alias Honosusori-no-mikoto, while fishing, and was severely tormented from his elder brother. Perplexed, he explained the matter to an old man that he met at the beach, and was taken to Ryuogu(dragon king's palace). The dragon king there arranged the fishhook to be found, and Yamasachihiko became the husband of the dragon king's daughter. He visited his brother to return the fishhook, and punished him using the "high tide ball" and the "low tide ball" given to him from the dragon king. Later, because the princess became pregnant, a maternity room was set in Yamasachihiko's hometown, where the princess gave birth. Then, Yamasachihiko became emperor, and his elder brother offered tributes every season.

This set of scrolls is a reproduction created during the Edo period, and the original is the *Illustrated Scrolls of Prince Hikohohodemi-no-mikoto* considered to be made in the middle of the 12th century. The original set was passed down in Shin-hachimangu in Matsunaga manor of Wakasa province(presently Obama city, Fukui prefecture), transferred to Myotsuji temple in Matsunaga manor, and then presented to the shogun Tokugawa Iemitsu from the feudal lord Sakai Tadakatsu. Before presenting the original set, Tadakatsu ordered Kano Taneyasu to create a reproduction which still exists in Myotsuji temple. This set of scrolls was probably created after Myotsuji temple's reproduction, but the painter is unknown. It is a valuable work that shows the presence of the original that is presently lost.

若蘭絵巻　仇英

1巻
絹本着色　中国・明時代（16世紀）
本紙　31.6×938.2㎝

Illustrated Scroll of Yun Yan (Jakuran)　Qiu Ying,

1 scroll, color on paper, Ming Dynasty, China,16th century
area of the paintings: 31.6×938.2

A story about Su Hui (Yun Yan), a woman of the mid-4th century in China, with an 840 character poem written at the beginning of the illustrated scroll. This poem is extraordinary, being able to be read in various ways that count up to more than 3000, arranged so that they can be read forward or backward. The content is as follows;

Yun Yan's husband Doutao was governor of Qinzhou, serving the Emperor Fujian of the Qianqin dynasty, but suffered because of relegation. Jealous that Doutao loved his mistress Zhao Yangtai, Yun Yan did not accompany Doutao when he moved to Xiangyang, and Doutao took only Zhao Yangtai with him. Left alone, Yun Yan regretted that there was no contact from her husband, and sent him a poem woven into a five-colored brocade. The poem titled *Xuanji Tu*, was skillfully composed and could be read forward and backwards. Doutao was so impressed that he cordially welcomed Yun Yan once again.

The illustrated scroll is depicted in four scenes. The first scene is where Yun Yan is weaving the palindrome poem into the brocade, the second scene is where she sends the completed brocade by a messenger to her husband, the third scene is her husband and other people impressed by the brocade, and the fourth scene is where Yun Yan receives a letter from her husband and departs headed towards her husband's whereabouts. The heroine Yun Yan is depicted with delicate expression, and teeming nature, buildings, with supporting figures placed in the scenery, allow the viewer to image affluent extensity with landscapes and continuity of space which are features emphasized in Chinese scroll paintings.

をくり（小栗判官絵巻）　伝岩佐又兵衛

15巻
紙本着色　江戸時代（17世紀）
本紙　巻１：33.8×1246.9㎝　巻２：33.8×1238.8㎝　巻３：33.7×1250.8㎝　巻４：33.7×1249.1㎝　巻５：33.7×2488.6㎝
巻６：33.8×2498.0㎝　巻７：33.7×2509.4㎝　巻８：33.8×2480.9㎝　巻９：33.8×2486.1㎝　巻10：33.8×2475.7㎝
巻11：34.0×2493.7㎝　巻12：34.0×2489.8㎝　巻13：34.0×2497.5㎝　巻14：33.9×2493.4㎝　巻15：34.0×2499.4㎝

Okuri – Illustrated Scrolls of Oguri Hangan　attributed to Iwasa Matebei

set of 15 scrolls, color on paper, Edo period, 17th century
area of the paintings - scroll no.1: 33.8×1246.9　scroll no.2: 33.8×1238.8　scroll no.3: 33.7×1250.8　scroll no.4: 33.7×1249.1
scroll no.5: 33.7×2488.6　scroll no.6: 33.8×2498.0　scroll no.7: 33.7×2509.4　scroll no.8: 33.8×2480.9
scroll no.9: 33.8×2486.1　scroll no.10: 33.8×2475.7　scroll no.11: 34.0×2493.7　scroll no.12: 34.0×2489.8
scroll no.13: 34.0×2497.5　scroll no.14: 33.9×2493.4　scroll no.15: 34.0×2499.4

The story originated from the legend of the Oguri family that ruled the Oguri–no Mikuriya in Hitachi province during the middle ages. It was recited by the priests of the related Jishu sect head temple Yugyoji Temple, who walked around preaching their doctrines while chanting prayers to Buddha. It was then connected with music to promote people's interest and was enhanced around the story of Oguri and Terute, widely spread as a *sekkyo-bushi* (sermon ballads), and furthermore was performed with puppets, and later developed into a Kabuki play during the Edo period.

The text of the *sekkyo-bushi* puppet show is used in the explanatory texts of these illustrated scrolls, and its contents is as follows; in scroll no.1, the noble officer Nijo Kaneie of Kyoto is blessed with Oguri as a gift child of the Bishamonten worship, scroll no.2 to 5 begin with selecting Oguri's wife, and then a great snake of a deep muddy pond disguised as a beautiful woman trades vows with Oguri, who thus was transported to Hitachi province. Then he meets Terute who was the gift-child of Nikko worship. She was the only daughter of the Sagami and Musashi county representative Yokoyama, and Oguri marries her after exchanging love letters. In scroll no.6-8, Yokoyama angry at Oguri because he married into the family without permission, sets a wild horse Onikage to assault Oguri, but Oguri succeeds to ride the horse, so next Yokoyama kills him with poison. In scroll no.9-10, Terute escaping from the danger, is sold to various merchants one after another, and refusing to become a courtesan, she becomes a maid-servant. In scroll no,10-13, Oguri is judged by Enma Daio (the Great King Yama, judge of the afterlife) and converted into an uncanny-looking starving demon, and then aims for the Yunomine hot spring at Kumano Hongu, riding an earth carrying cart pulled with the help of various people on the way up the Tokaido highway. After bathing at Yunomine, he returns to his original appearance. During this passage, Terute is one of the people who helped pull the cart, without realizing that the demon was actually Oguri. In scroll no.14, after reunion with his parents, they withdrew the disownment, and then he meets Terute once again. In scroll no.15, after revenging Yokoyama and the others, he became rich, and passed away at age 83. Last of all, Oguri and Terute were enshrined as gods.

The scrolls are considered to be the work of Iwasa Matabei and his studio. Though features of expression of the plump cheeks and long chins referred to as Matebei's style, and the arch of the hands and feet fingers are common throughout the scrolls, different painting styles can also be seen, showing that a large number of people participated . By the explanatory texts, the scenes progress one after another over the time transition like an animation, making it a set of illustrated scrolls that attracts its viewers.

酒伝童子絵巻

5巻
紙本着色　江戸時代（17世紀）
本紙　巻１：35.0×1179.2㎝　巻２：35.1×1208.7㎝　巻３：35.2×950.4㎝　巻４：35.1×1068.5㎝　巻５：35.2×1006.3㎝

Illustrated Scrolls of Shutendoji the Ogre

set of 5 scrolls, color on paper, Edo period, 17th century
area of the paintings - scroll no.1: 35.0×1179.2　scroll no.2: 35.1×1208.7　scroll no.3: 35.2×950.4
scroll no.4: 35.1×1068.5　scroll no.5: 35.2×1006.3

The *Shutendoji* is a tale about ogre extermination by Minamoto-no Raiko (Yorimitsu), which was popular from an early stage, becoming the subject of many illustrated scrolls and books. It is a representative samurai tale popular until the later eras. These illustrated scrolls are a set of glamourous colorful scrolls, with a large amount of gold foil and gold paint used throughout, and were probably commissioned by a high ranked person. The content of the tale is as follows;

During the rule of Emperor Ichijo, incidents occurred where beautiful court women disappeared one after another. One night, the only daughter of Ikeda Chunagon (state councilor) also disappears. The Chunagon finds out from a fortune teller Seimei, who was popular in Kyoto, that the incidents were caused by the ogres that live in Senjogatake of Mt. Ibuki in Oumi province, and ordered Minamoto-no Raiko to attack them. Raiko receiving this Imperial order, prayed to Hachiman shrine and Sumiyoshi shrine for divine protection, along with Fujiwara Yasumasa and his four paladins, and they headed for Mt. Ibuki disguised as mountain priests. Raiko's party reached the ogre's residence, and met the ogre in the form of a Doji(child), and introduced themselves as mountain priests of Mt. Haguro in Dewa province. In order to disarm suspicion by the Doji, they received entertainment of human

出品目録
List of Exhibits

絵師草紙
1巻
紙本着色　鎌倉時代（14世紀）
本紙　30.1×788.6㎝

Story of a Painter
1 scroll, color on paper, Kamakura period, 14th century
area of the paintings -30.1×788.6

An illustrated scroll depicting the tragedies and comedies that occurred to a painter living in poverty, considered to have been created around late Kamakura period.

One day a poor painter living in Kyoto, received an estate from the Imperial Court. The painter held a grand banquet gathering all of his relatives to celebrate. Later the painter sent a messenger to inspect the land, but found that it was a dangerous place where farmers used weapons and someone had already collected the land-tax. Realizing that joy for the gift of land was premature, the painter's family was at loss. The painter appealed to the Oversight Department (responsible for controlling central and provincial governmental offices) officer at Hosshoji temple, but was disregarded. Then the painter requested the court noble at Hosshoji temple, who transmitted petitions to the Emperor from important temples, to report to the Emperor. The petition was worthwhile and the painter was allowed to return the land, but he then impudently plead to exchange the land for somewhere nearer to Kyoto, and was never answered since then. The painter realized about the mutability of the world, and became a believer of Buddhism, and put his own child into a temple. Then he recorded these circumstances with his occupation using a paint brush, leaving this illustrated scroll.

This scroll was presented to Emperor Meiji by Tokugawa Iesato in 1887.

住吉物語絵巻
2巻
紙本着色　室町時代（16世紀）
本紙　上巻：24.0×1437.2㎝　　下巻：24.0×1436.5㎝

Illustrated Scrolls of the Tale of Sumiyoshi
set of 2 scrolls, color on paper, Muromachi period, 16th century
area of the paintings - scroll no.1: 24.0×1437.2, scroll no.2: 24.0×1436.5

The *Tale of Sumiyoshi* appears in the *Tale of Genji* and the *Makurano Soshi* (Pillow Book), so can be considered to have originated during the early Heian period, and was already a popular story in the 10th century.

The story is a Japanese version of Cinderella, where a beautiful but unfortunate girl grasps happiness in the end, in spite of being bullied by her stepmother. A court noble who was the Chunagon(state councilor) and also Saemon-no-kami(government official), had a beautiful daughter between the daughter of the late emperor. After the late emperor's daughter dies, the court noble has a second and third daughter between the daughter of the Shodaibu(high steward), and the first daughter was raised by the stepmother, along with her two stepsisters. Then, a fourth rank major general heard rumors about the first daughter's beauty, and proposes to her, but the stepmother schemes to make him marry her own daughter, and succeeds. However, the major general eventually realizes that his wife was the wrong person, and peeks through the pine tree shadows when the three daughters went out on an excursion to Sagano in the New Year, and increases his love. In the meanwhile, the Chunagon prepared to wed the first daughter to enter the palace, but was again interfered by the stepmother. The stepmother schemes to have the seventy year old Kazue-no-kami (the head of budget bureau) steal the first daughter. The first daughter relies on her own late mother's wet nurse living in Sumiyoshi, and escapes the residence. The major general finding out that she disappeared, prayed to the Hatsuse Kannon, and found out her whereabouts, visits Sumiyoshi and achieves reunion with her and takes her back to Kyoto. The two were married and prospered for a long time after.

This type of illustrated scroll with the explanatory text written within the picture is characteristic of the Muromachi period, showing that the recipient not only appreciated the illustrated scenes, but also the contents of the illustrations in the scroll.

Enjoying Illustrated Scrolls

July 4 (Sat.) – August 30 (Sun.), 2015

Foreword

In Japan, stories have been illustrated and mounted into scrolls to enjoy them, and illustrated scrolls have been created as artworks since the middle of the Heian period, around the late 10th century. At an early stage, when literature of the Heian period was formed and developed, illustrated scrolls were created with aristocratic themes. Gradually along with the rise of the samurai class, scrolls illustrating military history, and scrolls for the propagation of the Buddhist faith were created, to entertain a wide range of social strata. Just how the contents of the story is picturized and evolved depends on the expressions of the painter's images. Viewers can look at these illustrated images and enjoy the scrolls expanding their own images. Being able to enjoy these rich images is probably why illustrated scrolls have been familiar to so many people for such a long time.

In this exhibition, we will introduce the *Story of a Painter* (Kamakura period), which depicts the actual life of a painter, the *Illustrated Scrolls of the Tale of Sumiyoshi* (Muromachi period), which is a Japanese version of Cinderella, where the heroine grasps happiness in spite of being bullied by her stepmother, and the *Okuri – Illustrated Scrolls of Oguri Hangan* (Edo period), which is the popular *sekkyo-bushi* (sermon ballads) where a man and woman of curious fate overcome hardships. Also introduced are the *Illustrated Scrolls of Shutendoji the Ogre* (Edo period) about the well-known legend of ogre extermination at Mt.Oe, the *Illustrated Scrolls of Prince Hikohohodemi-no-mikoto* (Edo period), depicting the myths about Umisachihiko and Yamasachihiko in *Kojiki* (The Records of Ancient Matters) and *Nihonshoki* (Chronicles of Japan) , and the *Illustrated Scroll of Yun Yan (Jakuran)* (Ming Dynasty) about Su Hui (Yun Yan) of the mid-4th century in China, which illustrates the legend of the 840 characters palindrome poem that she sent to her husband.

We hope our visitors will enjoy the prolific images emerging from each of these illustrated scrolls.

July, 2015

The Museum of the Imperial Collections,
Sannomaru Shōzōkan